

「親子♪音楽を楽しむ会」における地域包摂型の実践は どう形づくられているか

— 北名古屋市社会福祉協議会職員の語りから考える —

How Community-Inclusive Practice Takes Shape in “Oyako♪ Music Enjoyment Group”

— *Narratives of Staff at the Kitanoagoya City Council of Social Welfare* —

伊藤 孝子 ITO Takako

(音楽領域)

柴田 朋子 SHIBATA Tomoko

(音楽領域)

太田 奈美 OTA Nami

(音楽療法グループマイエ)

杉田 政夫 SUGITA Masao

(福島大学)

【要旨】

本研究は、北名古屋市社会福祉協議会と音楽療法士が協働して行ってきた「親子♪音楽を楽しむ会」を取り上げ、地域にひらかれた本実践がどのように形づくられてきたのかを、社協職員の語りからたどった。コロナ禍で実践が中止となった2020年12月に実施した座談会形式のインタビューを分析し、①起案者が抱く「誰もが自然に集える場」への思い、②職員が企画から実施までを一気通貫で担える組織風土と、公募・保険加入など制度的運用、③楽器との自由な出会いと即興性を大切にする音楽療法士の音楽の進め方、の三点が響き合い、継続の土台をつくってきたことを示した。あわせて、中学生ボランティアの参画が子どもと大人のあいだをやわらかくつなぐ役割を果たしている点や、当日参加が難しいなど制度上の制約がアクセスの偏りを生みうる点等も課題として確認された。こうした実践の積み重ねが、地域における対等性と包摂の感覚を育てていく可能性を示唆する。

1. はじめに

筆者らは2015年度より、北名古屋市社会福祉協議会（以下、北名古屋市社協）と協働し、「親子♪音楽を楽しむ会」と題した企画を継続的に実施してきた。本活動の主旨は、障害の有無や通学先の特別支援学校・小学校といった区分を超えて、地域とつながるきっかけとなる場を設けることである。毎年、振り返りをもとに活動内容を修正しながら、2025年度まで約10年間にわたり運営を続けてきた。

本会は当初、北名古屋市社協からの依頼により始まったが、音楽療法士側がその活動に専門的意義を見出し、単なる受託事業にとどまらない主体的関与を続けてきた。その背景には、筆者のうち伊藤・柴田・太田が所属する名古屋芸術大学音楽療法グループ「マイエ」（以下、マイエ）における個人・小集団音楽療法の実践と省察がある。クライアント一人ひとりと向き合う個別療法の中で、その深まりや意義を実感する一方、個室内に限定された活動形態に一定の限界も感じていた。もし、そこで生じる音楽的・関係的な出来事

をクライアントの生活する地域コミュニティや日常的な場を開いていくことができれば、障害を個人の特性としてのみ捉えるのではなく、社会全体の価値観や見方の転換を促す場を創出できるのではないかと考えるようになった。このような問題意識が芽生えた時期と、北名古屋市社協からの依頼の時期が重なったことが、その後の双方の関わり方に大きな影響を与えたと考えられる。

コロナ禍により中止となった2020年度には、主要メンバーによる活動の振り返りと今後の展望を検討する機会を得た。その成果を共有するため、2021年度には日本音楽療法学会において自主シンポジウムを企画・開催した。同シンポジウムでは、北名古屋市社協の組織的枠組みおよび理念、ならびに音楽療法士側の実践的方略と理念の両面から「親子♪音楽を楽しむ会」の活動を検討した。さらに、指定討論者の杉田がコミュニティ音楽療法の視座からその意義を分析し、討論を通して多角的な議論を展開した^[1]。

長年にわたる「親子♪音楽を楽しむ会」の運営は、北名古屋市社協と名古屋芸術大学で活動するマイエによる組織間連携事業という性質を有する一方、実際には個々の職員やマイエメンバーの価値観、参加の仕方によって特質が形成・維持されてきたという実感がある。その実態を具体的に明らかにすることを目的として、自主シンポジウム企画と同時期に、音楽療法士による北名古屋市社協職員へのインタビューを実施した。本稿は、その際に得られたインタビュー内容から特質を抽出し、考察するものである。個々のインタビューの語りを手がかりに「親子♪音楽を楽しむ会」の意義を再考し、マクロな組織的・理念的構造のみならず、ミクロな実践的相互作用や個人の経験的意味づけが、いかに本会の存立を支えているのかを検討し、さらに、これらの分析を通して、今後の活動展開に向けた指針を見出すとともに、地域社会における音楽療法士の役割および多職種との協働の在り方についても考察することを目的とする。

本インタビューは、これまでの実践を共有してきた流れの中で、北名古屋市社協職員それぞれの語りにこそ次の展開への手がかりがあるとの判断に基づき実施した。社協職員への職業理念等についてのインタビューを扱った研究は一定数あるものの^{[2], [3]}、音楽療法に関連するものではなく、加えて連携する音楽療法士が自ら聴き手となる例は見当たらず、ここに本研究の独自性がある。また、共に実践を重ねてきた関係を基盤とした聞き取りであるため、抽象的な概念ではなく現場での意味として語りを捉えやすい。つまり、筆者らはこのインタビュー自体を実践のプロセスの一部として位置づけている点を、最初に明確にしておきたい。

2. 研究方法

インタビューは、2020年12月17日に、名古屋芸術大学音楽療法室において対面で1回実施された（所要約2時間）。円卓配置とし、自由発言を促す座談会の体裁をとった。インタビューアーは音楽療法士である筆頭筆者が務め、他の筆者らも自由発言とともにファシ

リテーション補助を担当した。インタビューは北名古屋市社協のいずれも「親子♪音楽を楽しむ会」に参与している現職者である実務担当職員3名であった。A氏は本会の企画立案者であり、B氏、C氏¹⁾は初期からの運営メンバーでインタビュー当時も本会の運営に参与し続けていた。

まず「親子♪音楽を楽しむ会」の振り返りと今後の方向性の確認という二つの目的を共有したうえで、インタビューの個人史や価値観、組織の枠組みやリソース、「親子♪音楽を楽しむ会」のこれまでの実践運営の振り返り、今後の展開の可能性等についてインタビューを実施した。

倫理的配慮として、実施に先立ち研究趣旨と手続の説明を行い、研究参加が任意であること、途中辞退の権利、録音の有無、成果の公表範囲について文書および口頭で同意を得た。参加者の同意のもと音声を録音した。録音データ・逐語録・分析メモはパスワード管理下で保管した。調査協力により不利益が生じないように配慮し、公開に際しては個人情報への配慮を念頭にオフレコ情報の排除と内容の理解を妨げない範囲での変更・省略等を行った²⁾。

3. インタビューにおいて語られたこと

本節では、インタビュー結果をカテゴリー毎にまとめて記述する。北名古屋市社協職員への座談会形式インタビューの逐語を質的に分析し、(1)各インタビューの当該会との関わりの経緯と個人的背景・価値観といったミクロ面、(2)社協組織の仕組みや運営上の工夫と制約といったマクロ面の2側面から整理し、考察した³⁾。以下にそれぞれの側面についてインタビュー内容を引用しながら具体的に述べる。

3-1. 当該会との関わりの経緯と初動の意思決定や個人的背景・価値観

本インタビューではまず、なぜA氏に「親子♪音楽を楽しむ会」を起案したかについて問うことから始まった。A氏は、自分の関わる他の企画に初めて成人の（聴覚）障害者が参加したことをきっかけに、なぜ多くの社協主催の活動に障害者が参加することが少ないのかという問題意識を持ったという。そのような思いを抱くようになった理由として、A氏は以下の個人的なエピソードを話している。

A氏　すごい昔の話になるんですけど、小学校の時に進行性の身体障害の同級生がいて、幼稚園の時から知ってるんですけど、最初は自分で歩いて、自分で階段

1) なお、C氏は仕事の都合によりインタビューの後半1時間のみの参加であった。

2) 本研究は、名古屋芸術大学大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものである。

3) 語りの内容は、財源や地域性（移動手段等）、社会福祉協議会の歴史的成り立ち、他の企画運営に関する業務等多岐にわたったが、本稿では「親子♪音楽を楽しむ会」に関連する項目に絞り検討している。

上って、途中から車いすが必要になって、各フロアと1階とに車いすが置いてあって、お母さんが毎時間毎時間次の授業の用意だとか、移動教室があれば移動させて、お手洗いに連れて行ったり、小学校の授業で45分間なんですけど、お母さん一旦帰ってまた来るんですよ。でもそれをずっと見てて、普通にいるのも当たり前だったし、お母さんがどうしても用事があって来れないと、クラスのみんでってなって。教室の移動があるときは、力の強い子がおんぶしたり、移動できる範囲で車いすを使ったり、っていうのが普通にあったので。中学校になると、中学校はその準備ができないって断られたらしいんです。私たちは一緒に上がるって思ってたんで、それが普通の生活だったから。でも駄目だと言われて、その子は一人養護学校に行くことになって。なんで？みんなでやればいいのになって。みんなでやるのが当たり前だったから、それができないってなって。中学校で離れて、高校であったときにはもうやっぱり自分では体を起こすことができなくて、それでもやっぱりお母さん、すごく背大きくなってたのに、おんぶしたりして、でもやっぱそこでちょっと階段上り下り大変だってなれば誰かしらが普通に行けるんで、それが当たり前。普通に、障害のある人が別に一緒にいるのも、普通だったんですね。

A氏は、このエピソードの中で、一緒に育った友人にたまたま進行性の障害があったこと、その友人の母親のサポートとともに自分たちもできることを協力しながら共に過ごしていたことを説明している。それが「普通」であったにもかかわらず学校制度等の中で徐々に共に過ごせなくなったことに対する疑問がこれまで胸の内にあり、それが今回の「親子♪音楽を楽しむ会」を企画するときの一つの根底となる原動力になっていると省察している。

またB氏は、高校時代の友人とのエピソードを以下のように語っている。

B氏 高校の友達が障害を持っていて。ずっと仲良くやってたんですけど、高校3年生になるとみんな受験とか就職とかの話になっちゃって、同じグループみんなもそんな話ばかりになってしまったから、その子は学校に来なくなっちゃいました。なんで来ないんだろうなと思ってたら、そういうのが精神的に結構つらかったみたいってことを後から知って。高校出てきたときに、「留学してたんだ」ってふざけてたけど、本当は結構いろいろ悩みがあってそこに関われなかったのはすごい悲しいなと思ったときがあった。

B氏はこの体験を機に臨床心理士を目指し大学進学することを決心し、その後の大学生活での出会いや経験を経て現職に就いたことを続けて語っている。A氏、B氏ともに、ご

く身近な人間関係で抱いた疑問や不安全感が現在の職業的価値観を支えていることが窺える。これらのエピソードはいずれも、A氏・B氏の学童期／青年期における友人関係に根差した、社協職員となる以前の個人的体験である。こうしたマイクロな対人経験への価値づけは、職業的役割を超える根底的な人間観として位置づけられ、インタビュー側である音楽療法士にとっても共有・共感が生じやすい。

二人の語りには、障害の有無による区分や制度的な「配慮」の枠を越え、友人関係のなかで社会参加に際して自発的に行われるケア行為が“普通”であるべきだ、という規範意識が窺える。こうした価値観は、地域の社会福祉を実現するという社会福祉協議会のミッションと親和性があり、「親子♪音楽を楽しむ会」においても通底する実践価値として基盤を成していると推察される。一方、音楽療法士の職業的教育は、とりわけ日本において、日常生活に何らかの困難を抱える個人を、音楽を使用して支援する立場を基盤として設計されている場合が多い。社会参加の権利保障（マクロ）と個別臨床としての療法（マイクロ）のあいだには、ときに目標ベクトルが反転し得る緊張関係が生じる。しかし、前述のようなマイクロレベルの個人的体験の共有は、この緊張を架橋し、職業的立場の差異を超えて共存を支える実践的基盤となり得る。

さらに、本会の立ち上がりを理解するうえで重要な点がある。すなわち、基盤にあったのはA氏の地域における「誰もが参加できる場」をめぐる想いと価値観であり、当初から音楽や音楽療法の実施そのものを目的化していたわけではないということである。A氏はこの点について、次のように述べている。

A氏 音楽療法をお願いするというもっと前の段階で、社協の講座が子ども向けがま
ずない。いつもは大人向けの講座がメインで、ボランティアさんを養成する
ことが大前提。子どももですが障害者が参加できるものもない。結構前になるん
ですけど一回だけ障害を持っている方がおもちゃ病院（おもちゃの修理ボラン
ティア）に参加して下さった。それが私は当たり前前の状況ができたかなって。
今までは健常の人しか来てなくて、障害の方が参加されて。ただ戸惑いは
あったんですよ。当初何の準備が必要だろうかとか、手話しか会話が難しいと
通訳の方がいるとか、いろんな状況があったんですけど、でも障害を持っている
方に参加をしてもらうのは別に普通のこと。これもっと普通にみんながいろ
んなものに参加できればいいのって思ってた。ある職員に相談したら、「い
い人いるから、芸大芸大」って言ってもらって、そこできっかけをもらえたん
でそれで声掛けをさせていただいて。その時にいた別の職員と一緒に三人で伺
わせていただいたのが最初です。

このように、音楽療法士への接続は人と人との縁によって生じたものであり、ここでも

多様な背景をもつ人々の「当たり前参加」を保障すべきだというA氏の価値観が先行していたことが窺える。

3-2. 組織枠組み・資源


ここでは、上記のような個人的価値観や体験が発端となって起案された「親子♪音楽を楽しむ会」が北名古屋市社協という組織の中でどのように可能になっていったかについて、インタビューで語られた内容についてまとめる。

C氏は北名古屋市社協の風土について、「職員がやりたいと考えた企画を自ら立案し、予算化し、実施まで一気通貫で担える」と述べる。この体制は責任の重さを伴う一方で、やりがいの大きさにも直結するという。前述のとおり、「親子♪音楽を楽しむ会」は、障害の有無を問わず子どもと保護者が“普通に”集う場が必要だというA氏の課題意識を起点としているが、その理念が会の名称・募集要件・実践へと直結した背景には、このような北名古屋市社協の風土の影響が大きいことが窺える。さらに、本会は2、3名の少人数で丁寧に進められており、ときに業務が立て込みやすい側面はあるものの、職員一人ひとりの工夫やつながりがそのまま形になりやすいという利点も見られる。このことは、職員や音楽療法士という役割を越えた「個人としての参加」を促し、時には各自の家族（子ども）が一参加者として顔を出し、運営に関与する場面へと結びついている。これらの出来事は、本会の柔軟性と個人性を象徴する重要な要素であると考えている。

一方で、「親子♪音楽を楽しむ会」は北名古屋市社協の事業の一環として位置づけられており、担当職員の異動に伴う交代が生じる点も本会の特性である。実際、A・B・C各氏は、2025年現在いずれも配置換えにより担当を離任しており、新任担当者とともに2025年度の実施準備が進められている。3-1. で述べたとおり、本会は職員一人ひとりの個人的エピソードや価値観が色濃く反映された企画である。そのため、担当交代はその都度、具体的な痛手として経験される。他方で、新たなメンバーの参入は、従来の方針を継承しつつも、これまでになかった活動や広がりを生み出す契機ともなる。この循環は、ミクロな関係性や思いを、よりマクロな視点（組織横断の仕組み化や地域連携の拡張）へと具体化していく動きを促すものとして位置づけられよう。

「親子♪音楽を楽しむ会」は、実施の約1か月前から公募を開始し、社協だよりおよびSNSを通じて市内に周知する募集型の枠組みで実施している。これにより、

令和7年10月1日 社協だより〈第79号〉



【福祉ふれあい講座】
親子♪音楽を楽しむ会
講師・名古屋芸術大学音楽療法士(他)

開催日	①11月9日(日)、②11月23日(日祝)、③12月7日(日)、④12月14日(日) 全4回
時間	午後2時～4時
場所	① 総合福祉センターもえの丘 2階ボランティア会議室 ②、③ 総合福祉センターもえの丘 1階ふれあい健康ルーム ④ 名古屋芸術大学キャンパス(交流イベントを予定しています) ※この日のみのご参加はできません。
内容	市内在住の幼児～小学生(障害のある方、ない方)の親子を対象に、みんなで音楽を奏でたり、音楽に合わせてダンスなど体を動かして、参加者同士お互いを理解し、一緒に楽しむことで友達が増えるきっかけになります。 ※障害のあるお子様については、必要な配慮などを申し込みの際にお伝えください。
持ち物	水分補給のための飲み物 参加費 無料
定員	20組40名 ※親子同伴での参加が必要です。申し込みが3組未満の場合は開催しません。
申込締切	10月24日(金)(電話もしくは二次元コードからお申し込みください)




写真1. 北名古屋市社協だより第79号(2025.10発行)より転載

毎年の常連参加者に初参加の親子が加わり、集団構成は年ごとに更新されている。公募制は市民一般へのアクセス経路を確保すると同時に、事前把握に基づくボランティア保険加入やリスク管理を可能にし、安全な運営基盤を支えている。一方で、当日参加の困難さや情報到達の偏りなど、いくつかの課題も指摘された。

A氏 やってることは間違いではないと思っているので、もう少し、ふらっときてもらえるじゃないですけど、ほんとにそれぐらいになるくらいになってくといいのかなあと。

伊藤 現実的な話、ふらっとくる、参加する、というのは社協さんにとって可能ですか？

A氏 社協は～…

B氏 保険の関係がダメですね。そこに難しさがあって。どうしても募集をして、ある程度の人数が集まらないとできない、という基準が設けられている。

例えば、会場を通りがかった親子から当日の参加可否を尋ねられた事例があったが、現行の運用上、その日の参加は認められず、事前申込のうえ翌週以降の参加となった。結果として、社協だよりや SNS を介して自発的に申込み親子に参加が限定されやすく、福祉や市民交流への関心が比較的高い世帯が選択的に集まりやすいという参加の偏りが生じている可能性がある。

もっとも、こうした制度上の要件は、いかなる実践にも表裏一体で随伴する条件である。制約もまた一種の資源と捉え、その枠組みを活かすかたちで運営を設計してきたからこそ、本会の長期継続が可能になったと考えられる。実際、社協会場（例：もえの丘）の確保や市民への広域的な周知は、音楽療法士のみでは達成し得ない機能であった。さらに、本会の特色である中学生ボランティアの参画も、北名古屋市社協が小・中・高校とのネットワークを長年維持してきた歴史的蓄積に支えられて実現している。

C氏 中学生のためにもボランティアという形で地域交流だったりとか、ボランティアという体験する場を提供するということが、これはやっぱり必要になるのかなっていう風には思いますね。

C氏の語りからは、ボランティアを運営上の補助人員として集めるのではなく、地域の中学生に開かれた社会参加のチャンスをつくることに重心が置かれていることが窺える。すなわち、立場の異なる市民が自然に加われる場づくりという本会の方向性が、ここにも表れている。中学生ボランティアの関与は、音楽療法士にとってもきわめて貴重である。従来の音楽療法実践では、第三者ボランティアが実践の場に入ることは稀である。一方、

北名古屋市社協ではボランティア募集が日常業務として組み込まれており、その延長として市民である中学生への自然な声かけが可能になっている。役割上も年齢層としても子どもと大人の“橋渡し”となる中間的存在である中学生ボランティアは、「親子♪音楽を楽しむ会」の根底にある〈普通の参加〉という価値観を具体化する中核的な要素として位置づけられるようになってきている。

本インタビューで見えてきたのは、「親子♪音楽を楽しむ会」が「誰もが“普通に”集える場をつくりたい」という起案者A氏の思いから出発し、北名古屋市社協と筆者ら音楽療法士の協働によって丁寧な形になってきた、という流れである。運営では、募集型で事前に参加を把握し、保険に加入し、会場を確保し、広報で案内するという、制度に沿った段取りが積み上げられてきた。その結果、当日参加は基本としないものの、安心して開ける場として続けることができている。

一方で、北名古屋市社協職員2、3名の少人数体制の中でも、職員それぞれの個人史や価値観が色濃く息づいていること、そして中学生ボランティアが“子どもと大人の間に立つ存在”として、会の〈普通の参加〉という考えを現場で支えとなっていることが確かめられた。さらに、社協職員の担当交代は痛手を負いながらも、方針の引き継ぎと新しい展開を同時に生み出すきっかけになっている。

つまり、価値観（普通の参加）と協働（社協×音楽療法士）と運営のしくみ（募集・保険・会場・広報）が、互いを支え合いながら、継続への動力を自ら作り出し、活動の蓄積と共有を重ねてきたと言える。次章の総合考察では、この枠組みの中で、音楽／音楽療法であったことの意味や今後の課題など、本稿で扱った論点を改めて整理していく。

4. 総合考察

「親子♪音楽を楽しむ会」は、起案者A氏の〈普通の参加〉への希求を具体化する過程で生まれたものであり、音楽療法士との接点は人的なつながりによって拓かれた。地域資源としての名古屋芸術大学と、そこに属する音楽療法の専門領域に出会ったことを受け、本企画のタイトルが後付け的に定まったという経緯である。言い換えれば、コンセプトを具現化する内容は必ずしも音楽／音楽療法でなくてもよく、別様の実践様式が選ばれる可能性も十分にあったということである。このように偶然に始まった組み合わせではあるが、約10年の継続の過程で、音楽および音楽療法士の関与が「場」を創造し、構成・維持するうえで機能し、そのことに確かな意義があったと考える。

まず、「親子♪音楽を楽しむ会」の音楽活動は即興性が高いことが大きな特徴である。起案者A氏は、従来関与してきた企画に倣い、当日の使用物やプログラムを綿密に設計した。音楽療法士もそれに呼応し、詳細な進行案の作成と会場での事前リハーサルを行った。このプロセスを通じて、音楽療法士側は普段はあまり意識しない企画の枠組みがどのように形作られるかについて学ぶ貴重な機会を得られた。

しかし、実際の開催場面では、特に子どもたちの動きは計画通りには進まない。音楽療法士は、参加者の反応に合わせてその都度アレンジし、場を編成し直しながら進行した。一般に音楽療法では、前もって決めたプログラムを固定的に適用することは少なく、その場の参加者の行為や意図に応じていかようにも変容していく。本会においても、この特性が明瞭に立ち現れたと言ってよいであろう。A氏は当初、こうした予定外の展開に戸惑いがあったものの、回を重ねる中で難しさを感じながらも「これこそがいろいろな立場の人の〈普通の参加〉を守るやり方なのだ」と受け止めるようになった。つまり、即興性は、参加の選択肢と度合いを広げる仕組みだという理解が、A氏自身の価値観と結び付いていった様子を音楽療法士も目撃したのである。

上記と関連して、楽器の存在は見過ごせない。楽器は演奏のための道具にとどまらず、視覚・触覚（ときに振動覚）を同時に刺激する。たとえ演奏しなくても、手に取る・触れる・眺めるといった関わりだけで参加の糸口が生まれる。音楽療法で用いる楽器は民族楽器などを多く含み、素材や手触りの多様性が特徴である。「親子♪音楽を楽しむ会」では、会場のサイドにさまざまな楽器を見えるかたちで配置して始める。すると、とくに子どもは自然に関心を向け、自発的に手に取り、鳴らし、試し出す。音楽療法士や社協職員が最初から強く導かなくても、楽器との自由な出会いから会が始まり、一人ひとりが自分の方法と速度で参加度を高めていく。このことが参加の仕方の多様性を担保し、〈普通の参加〉が承認される場を形成していく。つまり、物（楽器）と自分の二者関係を各参加者がまず探ることで、主催者側の意図の有無にかかわらず、その人なりの参加のかたちが立ち上がる。ここに、音楽／音楽療法であることの意味がひとつあるといってもよいであろう。

子どもたちの自由な探索に先導されるかたちで、親世代や中学生、スタッフもそれぞれの参加の仕方を模索しはじめる。こうした行為の連鎖は、子ども／大人、参加者／ボランティア、参加者／主催者といった二項対立的になりがちな区分を感覚的に緩め、一時的ではあるがその場に対等性を立ち上げる。この役割境界のゆるやかな解きほぐしは、コミュニティ音楽療法が重視するポイントとも合致している。

もっとも、すべての子どもが主体的な探索へ向かうわけではない。場になじめず所在なげに過ごす子、保護者のそばを離れがたい子、座ってじっとしている子が同時に存在し、乳幼児については発達上、探索まで至らない場合もある。このような場合でも音楽の特性が有効に働く。音楽は時間とともに消えていく一回性を持ち、活動の痕跡を必ずしも残さない。また、聴覚を使用する体験であるため、音を出さなくても、聴くだけ、あるいはじっとしているだけでも参加として成立する。何らかの成果物の作成や明確な自己表現を伴わなくても、その場にいることそのものを正当な参加形態として認めうる。この音楽の包摂性は、本会が目指す〈普通の参加〉の価値と整合的であると言える。

以上に示した音楽活動の特性は、その価値をどのように位置づけ、いかにファシリテートするかによって大きく左右される。主催側の導き次第では、活動は成果主義的に傾きう

るし、「正統的な参加」の型をあらかじめ規定することも可能である。そもそも社会には多様な音楽実践が存在しており、いくつかを思い起こすだけでも、相反する価値観を伴う場が並立していることは想像に難くない。「親子♪音楽を楽しむ会」の目指すものにおいて、活動内容を主導する側が「音楽療法士」であったことに意味があったと考える。我々音楽療法士は、日々の実践においてそれが個人療法であろうと集団療法であろうと、それぞれの参加者（クライアント）にとって可能であり望む形での関与の姿を模索している。その姿勢が本会でも活かされ、〈普通の参加〉を基軸に、こうした特性が排除ではなく包摂へと働くよう関与・運営してきた点に意義がある。

上記の価値が実践のなかで体得されやすいことも、音楽の特徴である。音楽的行為は、集団的な同調（拍・リズム・合図への同期）から、個人のごく微細な動きや表情の変化までを内包する。前者は比較的捉えやすいが、後者は注意深い観察を要する。加えて、音楽活動における観察は、しばしば関与しながら行われる。すなわち、参加者の意図的な表現のみならず、意図していなくても滲み出すもの（姿勢の緩み、視線、呼吸や揺れの変化等）をも感じ取り、応答（テンポ・音量・間の調整や受け止めの言葉）によって呼応することで、そこに潜在する価値が顕在化される。このような観察—応答の往還を通じて、音楽療法士と社協職員は、参加者の変化と自らの関与を重ね合わせながら、対等性や〈普通の参加〉の実践を手触りとして捉えてきた。本会におけるこの経験知は、単なる理念の共有にとどまらず、場づくりの具体的技法として蓄積された点で意義が大きいと考えている。このことに関連してC氏は、「自分自身が、（一参加者として）すごく楽しんで参加しています」と語っている。また、今回のインタビューとは別の機会に以下のようにも述べている。

C氏 社協で行う他の講座やイベントでは、場を提供したり何かを与える側という面が主だったが、この会はそうではなくて参加者の行為を観察することで、様々な気づきを得たことが新しい体験であった。こちらが参加者の好きなことや特技などを深く知ることによって新しい何か生まれる可能性が広がるのではないか^[4]。

コミュニティ音楽療法の理論的牽引者であるスティーゲは、自著においてアンズデルやパヴリチェヴィックの議論を参照し、音楽すること（musicking）が他者への敬意を遂行する媒体となりうることを示唆している^[5]。つまり、胸の内に敬意を掲げるだけでは不十分であり、それが場で実際に行われる（示される）ときに初めて、相互の受容が現実化するという立場^[6]である。「親子♪音楽を楽しむ会」でも、この点は重視された。一見些細で見過ごされがちな出来事を、参加者とともに観察し、言葉や音で承認し続けることによって、音楽療法士のみならず社協職員の理念が実践として立ち上がり、さらにその遂行

が場のかたちを編成していったと考えられる⁴⁾。

最後に、インタビューから見える今後の課題についてまとめる。A氏はインタビューにて「参加される人が少ない。もっとたくさん親子で募集をして、理解をしていただける場になると思ってたんだけど、なかなかそれが思うようにいかない。」との悩みを吐露している。またC氏は「子ども同士の交流はできても、親同士の交流っていうとなかなか…。事業としてはとてもいいが、親御さんがより参加しやすく交流できるような場になったほうがもっとつながりが出来てくるんじゃないか」と参加の広がりについて言及している⁵⁾。これについて二つの観点から考察する。

第一に、インタビュー内容で示したように、本会は社協だよりやSNSによる広報を通じた募集型で運営されているため、福祉や市民交流への関心が比較的高い世帯に限定されている可能性がある。実際には、こうした場へのアクセス支援をより必要とする家庭が潜在的に少なくないことも想定される。子どもや家族が抱える課題は、個々の家庭内の問題にとどまらず、地域的な支えを要する場合が多い。加えて、「親子♪音楽を楽しむ会」は、多様な背景をもつ親子が“あたりまえに”参加できる場の実現を理念として掲げており、現行の募集手法が理念の到達範囲を限定してしまう可能性について、今後の検討が求められる。

この点に関しては、筆者のうち伊藤・杉田が2016年に視察したノルウェー・ベルゲンにおける児童福祉領域のコミュニティ音楽療法が示唆的である⁷⁾。同実践はヴィーゴ・クリューガー (Viggo Krüger) が主導し、自治体が管轄する FANA 文化センターを拠点として、多様な背景をもつ子ども・青少年が、音楽活動を通して文化活動や社会参加を拡張していくことを支援することを目的としていた。注目すべきは、文化センター通所の前段階として、対象者の居住地に出向き、安心できる場所で安全な関係を確立する“アウトリーチ段階”を制度的に位置づけていた点である。対象者によってこの段階の期間は短期で完了する場合もあれば、長期を要する場合もあるとのことであった。自発的参加が難しい人びとに対し、専門職側が居場所へ出向いて関係性を築くという実践は、日本において直ちに実施可能とは限らないものの、アクセス格差を埋める有効な選択肢として検討に値するだろう。

第二に、本会は年度ごとに新規募集し、限られた回数で実施される“イベント型”であるため、参加者にとっての実践コミュニティ⁶⁾としては育ちにくい。言い換えれば、居場

4) 彼らはこの主張を補強するにあたり、「敬意は表出されるパフォーマンスである。すなわち、たとえ世界で最も良い意志を持っていたとしても、他者を敬意でもって扱うことは起こらないのである。」と論じたりチャード・セネット⁶⁾を参照している。

5) 参加者数について、本インタビュー実施以降は徐々に増加し、2023、2024年度は20名、2025年度に関しては30名を超える親子市民の参加が実現している。一方で、年々中学生ボランティアの参加の募集が困難になってきていることは課題である（とはいえ、2025年度は5名の参加があった）。

6) 実践コミュニティとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」⁸⁾のことを意味する。

所（継続的に戻ってこられる場）の機能は生まれにくく、主催—参加の境界を越えて参加者自らが場の継続や創出を担うような態度の転換は起こりにくい。この点には制度的制約も関わっており、成立の経緯を踏まえるなら、居場所化を性急に求めるよりも、「障害の有無を越えた社会的交流に関心をもつ親子が集う」という特性を活かし、啓発・周知の側面をもう少し前面に出す選択も考えられる。たとえば、市内の他事業や地域行事との協働参加を次の一歩として位置づけることは可能である。もっとも、公開の場での音楽パフォーマンスの披露が目的化すると、成果物志向に傾きやすく、本会が大切にしてきたそれぞれの参加の自由と微細な姿の観察の場を損なうおそれがある。したがって、社協職員と音楽療法士の専門性、これまで蓄積してきたミクロな関係性の知を土台に、試行し、振り返り、調整するという地道なプロセスを今後も歩むのが望ましい。今回のインタビュー体験もその一環であったと言ってよいであろう。

本稿では、「親子♪音楽を楽しむ会」について、北名古屋市社会福祉協議会職員の語りから地域包摂型の実践がいかに形づくられてきたかを検討した。本会の理念である〈普通の参加〉に照らせば、今後の課題として、音楽療法士および参加者の視点を重ね、多声的に実践の意味をさらに検討していく必要があるであろう。

引用・参考文献

- [1] 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫他、社会福祉協議会と音楽療法士の協働—持続可能な実践コミュニティの実現を目指して—、名古屋芸術大学研究紀要、43巻、2022、pp. 1-20
- [2] 河島京美・秋元健策・田口晋・松本洋子、都市部社会福祉協議会職員の人材育成に関する一考察—東京都城西地区ブロック社協管理職インタビュー調査から—、地域福祉実践研究、8巻、2017、pp. 68-80
- [3] 南友二郎、地域共生社会構築に向けた方法論研究—都城市社会福祉協議会元職員へのインタビュー調査から—、桃山学院大学社会学論集、53巻2号、2020、pp. 33-58
- [4] 伊藤孝子・柴田朋子・杉田政夫他（2022）、p. 13
- [5] スティーゲ・ブリュンユルフ、オーロ・エドヴァルド・レイフ著、杉田政夫監訳 伊藤孝子他訳、コミュニティ音楽療法への招待、第1版、風間書房、2019、pp. 280-281・pp. 327-328
- [6] Sennett, Richard, *Respect: The Formation of Character in an Age of Inequality*, PENGUIN BOOKS, London, 2003
- [7] 杉田政夫・伊藤孝子・青木真理、ノルウェーにおけるコミュニティ音楽療法の今日的展開に関する研究—スティーゲへのインタビュー及び実践現場への訪問調査を中心に—、福島大学地域創造、第32巻第2号、pp. 37-53のうち特に pp. 44-48
- [8] ウェンガー、エティエンヌ他著、野村恭彦監修、コミュニティ・オブ・プラクティス、翔泳社、2002、p. 33

Abstract

This study focuses on the “Oyako ♪ Music Enjoyment Group,” a long-term collaborative project between the Kitanagoya City Council of Social Welfare and music therapists, and traces how this community-oriented practice has been shaped through the narratives of council staff. A semi-structured, round-table interview conducted in December 2020—when activities were suspended due to the COVID-19 pandemic—was analyzed. The results revealed three interrelated factors that have sustained the project: (1) the initiator’s aspiration to create a space where anyone can naturally gather, (2) an organizational climate that enables staff to manage projects from planning to implementation, supported by institutional procedures such as public recruitment and participant insurance, and (3) the music therapists’ approach emphasizing free encounters with instruments and improvisation. The participation of junior-high school volunteers also played a gentle bridging role between children and adults, while institutional constraints—such as the difficulty of same-day participation—were found to limit access for some families. The accumulation of such practices suggests the potential for nurturing a sense of equality and inclusion within the local community.